

詩篇51－55篇「人の罪の奥深さ」

1A 自分自身の咎 51

1B 罪の清め 1－9

2B 救いの喜び 10－17

3B 義のいけにえ 18－19

2A 身近な者の欺き 52

1B 悪への誇り 1－4

2B 恵みによる栄え 5－9

3A 誰一人いない善人 53

1B 腐り果てた者たち 1－3

2B シオンから来る救い 4－6

4A 見知らぬ者の敵意 54

1B 神を前に置かぬ者 1－3

2B 命を支える方 4－7

5A 親しい友の裏切り 55

1B 泣きわめき 1－8

2B 内にある敵 9－15

3B 重荷を負われる主 16－23

アウトライン

詩篇 51 篇から 55 篇までを読みます。私たちの学びの焦点は、「人の罪の奥深さ」であります。初めにダビデ自身が罪を犯し、そして次にダビデの身近な人々が罪を犯している姿を見て、人がいかに腐ってしまっているか、その堕落した姿を見ます。しかしそれは絶望するのではなく、午前礼拝でお話したように、むしろ神の恵み深さを知る道であり、救いの喜びに満たされるための方法であります。

1A 自分自身の咎 51

1B 罪の清め 1－9

51 指揮者のために。ダビデの賛歌。ダビデがバテ・シェバのもとに通ったのちに、預言者ナタンが彼のもとに来たとき 51:1 神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をぬぐい去ってください。51:2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。51:3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれると

き、あなたはきよくあられます。

ダビデの数多くの詩歌は、正しい者が救いを受け、悪者が滅びるよという祈りでありました。第一篇がその典型的な祈りです。ダビデはいつも、自分の心の直ぐなことに気を使っていました。ところが今、その自分が悪と咎を行つたのです。そこで、この悔恨の祈りになっています。

ダビデが靈的に優れているのは、その祈りがすぐに神のご性質に拠っていることです。罪咎を犯したのですが、その祈り始めは「御恵みによって」となっています。神が恵みに富んだからであるから、私の罪をことごとく拭い去ってくださいと祈っています。そして、罪を犯したことを認めることについては、「あなたが宣告されるとき、あなたは正しく」と言っています。神の公正と正義をいっさい曲げないで告白しています。彼が他の詩歌で言っているように、彼の前に神がいつもおられるのです。神を自分の前に置いています。

51:5 ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。51:6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。

母の胎から既にある罪、生まれながらの罪の性質について、これが心の真実であり、このことを悟るのは知恵であると彼は言っています。このことを知っているか知っていないかで、私たちは神の理解、人の理解、この世界の理解、すべての理解が全く変わってしまいます。例えば、昔は共産主義者が、そして今はイスラム主義者が世界に革命を起こそうとしましたし、しています。今の世は墮落しています。けれども彼らの落とし穴は、人に罪があること、人が全く墮落していて、自分では直せないことを知らないのです。ですから、彼らが善を志向すればするほど、むしろ恐ろしい悪を行なうのです。

51:7 ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。51:8 私に、楽しみと喜びを、聞かせてください。そうすれば、あなたがお砕きになった骨が、喜ぶことでしょう。51:9 御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください。

ダビデがここで思い描いている、罪の拭い去りの姿は、らい病人が清められる時の儀式です。レビ記 14 章 2-9 節を読んでみましょう。「らい病人がきよめられるときのおしえは次のとおりでなければならない。その者を祭司のところに連れて来る。祭司は宿営の外に出て行き、調べて、もしらい病人のらい病の患部がいやされているなら、祭司はそのきよめられる者のために、二羽の生きているきよい小鳥と、杉の木と緋色の撚り糸とヒソプを取り寄せるよう命じる。祭司は、土の器に入れた湧き水の上で、その小鳥のうちの一羽をほふるよう命じる。生きている小鳥を、杉の木と緋色の撚り糸とヒソプといっしょに取り、湧き水の上でほふった小鳥の血の中に、その生きている小鳥

といっしょにそれらを浸す。それを、らい病からきよめられる者の上に七たび振りかけて、その者をきよいと宣言し、さらにその生きている小鳥を野に放す。きよめられる者は、自分の衣服を洗い、その毛をみなそり落とし、水を浴びる。その者はきよい。そうして後、彼は宿営にはいることができる。しかし七日間は、自分の天幕の外にとどまる。七日目になって、彼はすべての毛、その髪の毛と口ひげとまゆ毛をそり落とす。そのすべての毛をそり落とし、自分の衣服を洗い、水をそのからだに浴びる。その者はきよい。」

小鳥を一羽ほふります。その血を湧き水の入った土の器の上で注ぎます。そしてもう一羽の小鳥を、杉の木、緋色の撚糸、そして、今ダビデが話しているヒソプといっしょに、その血の入った水に浸します。それから、生きた小鳥を放つということです。この儀式によって、らい病人が清められたことを宣言して、それでようやく宿営の中に入ることができます。ところでヒソプは灌木ですが、その根っこが髪の毛のようになっていて、それで過越の祭りの時は門柱と鴨居に、子羊の血をあてがいます。

らい病の清めについて、この一つ一つの細かいところが、私たちの主イエス・キリストがなされたことを表しています。土の器は人の肉体です。そこには湧き水、聖霊の泉があります。そこに小鳥の血、すなわち主が死んで、血を流されました。その中には共に杉の木もあります。キリストは十字架の木につけられました。そして緋色の糸はもちろんキリストの血潮の色です。そして生きた小鳥は復活したキリストであります。キリストの流された血、そして聖霊による洗い、それからよみがえりにより新しい命をもって、らい病人の肌がきれいになったように私たちも罪から清められるのです。雪のように白いというのは、らい病の清められた姿であり、罪から清められた姿です。そして宿営にらい病人が戻れるように、ダビデも神の御前に戻れるようにしてほしいと願っています。

2B 救いの喜び 10-17

51:10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。51:11 私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。51:12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。

罪の清めによって、主に仕える霊が回復できますようにと祈っています。その清い心により霊が揺るぐことなく、御前に留まることができ、救いの喜びに基づく神への奉仕ができます。そうです、私たちの奉仕は、救いの喜びに支えられた、喜んで仕える霊です。したがって、私たちは神に仕えるということについて真実に知りたかったら、まずは罪の清めを知り、救いの喜びを知っていることです。

51:13 私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。51:14 神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。そうすれば、私の

舌は、あなたの義を、高らかに歌うでしょう。51:15 主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう。

神に喜んで仕え、それから神の証しを他の人に立てることができ、そして神をほめたたえることができます。

51:16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。51:17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

これほど大切なことはないでしょう。私たちキリスト者が行なうことの中で、何よりも尊い働きは、主に対して砕かれた心を差し出すことです。私たちがどんなに物理的に神に奉仕をし、教会の活動にいそしんでも、神の最も喜ばれるのは、自分の心の真実を見、それに深い悔恨を覚え、神の前に出て告白することです。「砕かれる」とあるように、私たちの心は元々頑なです。それを砕いていただくことによって、私たちの心に真実な喜びが取り戻されます。

3B 義のいけにえ 18－19

51:18 どうか、ご恩寵により、シオンにいつくしみを施し、エルサレムの城壁を築いてください。
51:19 そのとき、あなたは、全焼のいけにえと全焼のささげ物との、義のいけにえを喜ばれるでしょう。そのとき、彼らは、雄の子牛をあなたの祭壇にささげましょう。

先ほどの、全焼のいけにえを喜ばないという記述と矛盾しているかのように見えますが、そうではありません。砕かれた心にある神の憐れみに基づくいけにえを、義のいけにえと呼びます。神はご自身が憐れんでくださった者を、義と認めてくださいます。その者たちが捧げるいけにえが、義のいけにえであり、その砕かれた心を持っている者が全焼のいけにえを携える時に、それを神は快く受け入れてくださるのです。

2A 身近な者の欺き 52

52 指揮者のために。ダビデのマスキール。エドム人ドエグがサウルのもとに来て、彼に告げて「ダビデがアヒメレクの家に来た。」と言ったときに

52 篇からダビデの身近な者が、彼を裏切る姿を見ていきます。初めは、エドム人ドエグです。これは、ダビデがサウルから逃げ始めた時に、ダビデが祭司のいる幕屋のところに来た時のことです。ダビデはひもじかったので、パンをくれるようにお願いしました。また剣もあるか尋ねました。アヒメレクは、供えのパンの机から取り降ろしたばかりのパンを彼に与え、かつてダビデがゴリヤテを倒した時の、ゴリヤテの剣がありました。これを受け取って続けてサウルから逃げました。

ところが、そこにドエグがいたのです。「そこにはサウルのしもべのひとりが主の前に引き止められていた。その名はドエグといって、エドム人であり、サウルの牧者たちの中のつわものであった。(1サムエル 21:7)」とあります。サウルは、柳の下で槍をもって座って、誰も自分のことを思って心を痛めてないと嘆きました。そして、ダビデがどこにいるか教えてくれるなら、畑をあげるし、お前たちを千人隊の長、百人隊の長に昇進させるのに、と言いました。そこで出てきたのがドエグです。アヒメレクがダビデにパンと剣を与えるのを見たと言いました。

それでサウルは、アヒメレクのところに行き、責めました。アヒメレクはダビデが何を悪いことをしたのでしょうか、と言いました。ところがサウルは何と、「主の祭司たちを殺せ」と言ったのです。こんな恐ろしいことはできません、ところがドエグが祭司たちに打ちかかったのです。85 人もいました。彼は神の幕屋に来ていましたが、その心は主への礼拝ではなく、ただ主君に好意を得たいと思っていただけであり、心は主を憎んでいたのです。エドム人という説明も意味深です。ヤコブから長子の権利を奪われたエサウの末裔です。主に関わるものを彼らは憎んでいました。

けれども、祭司の家族の中で一人だけ生き残り、ダビデのところに逃げてきたエブヤタルがいました。それ以来、ダビデのところにエブヤタルがいました。そこで歌ったのがこの詩歌です。

1B 悪への誇り 1-4

52:1 なぜ、おまえは悪を誇るのか。勇士よ。神の恵みは、いつも、あるのだ。52:2 欺く者よ。おまえの舌は破滅を図っている。さながら鋭い刃物のようだ。52:3 おまえは、善よりも悪を、義を語るよりも偽りを愛している。セラ 52:4 欺きの舌よ。おまえはあらゆるごまかしのことばを愛している。

ドエグのことを、「欺く者」「偽り」そして「ごまかしのことば」と言っています。けれども、ドエグはダビデがアヒメレクからパンと剣を受け取ったのを見た、と言いました。これは事実そうでありました。しかしダビデはその正反対のことを言っています。ここから私たちは、何をもって真実なのか、何をもって偽りなのかを知らなければいけません。まずもって、ダビデがサウルに危害を加えているという妄想から、サウルがダビデを追っています。ダビデがそのようなことを一切していないのに、そのことに基づいて殺人を実行しようとしている、このこと自体が神の前で偽りなのです。サウルの他の部下は、そのことをよく知っていたので、それでダビデが逃げていることを知っていてもサウルに伝えていなかったのです。

ただ言葉として正しいことを言うことが、真実を語っているものではありません。むしろ、神の真実に沿った生き方をしているかどうかの方が大事なのです。かつてヘブル人の助産婦が、パロに生まれた男の子を殺せと言われました。しかし、赤ちゃんは自分たちが産み台のところに行く時には、産んでしまっている、と言いました。これが嘘をついているのかどうか？実際は分かりません、けれどもはっきりしているのは、神の真実に沿った行為だということです。

そしてここで大事なのは、「神の恵みは、いつも、あるのだ。」とダビデは、しっかりと信仰の立場を取っていることです。ダビデは自分の主君に追われているという最悪の状態にあっても、その中にあってなおのこと神の恵みの原則が働いていることを信じていました。サウルの息子ヨナタンが、ダビデと永久の契約を結んでいました。ヨナタンの子孫に恵みを施すとダビデは誓っていました。ダビデがそれを守るということは、そのまま彼がサウルの手から逃れ、逃れるだけでなく彼がイスラエルの王となることを意味していました。この最悪の時にもその恵みが働いていると信じました。

2B 恵みによる栄え 5-9

52:5 それゆえ、神はおまえを全く打ち砕き、打ち倒し、おまえを幕屋から引き抜かれる。こうして、生ける者の地から、おまえを根こぎにされる。セラ 52:6 正しい者らは見て、恐れ、彼を笑う。52:7 「見よ。彼こそは、神を力とせず、おのれの豊かな富にたより、おのれの悪に強がる。」

ドエグは、サウルから家をあてがわれという褒美を受けたかもしれませんが。しかしその幕屋は引き抜かれて、幕屋だけでなく、自分の肉体という幕屋までも根こぎにされるとダビデは宣言しました。富を得るために悪を行なう者に対して、私たちは妬むことはありません。むしろ、その最期を信仰によって見て、哀れであるとみなせばよいのです。

52:8 しかし、この私は、神の家にあるおい茂るオリーブの木のように。私は、世々限りなく、神の恵みに拠り頼む。52:9 私は、とこしえまでも、あなたに感謝します。あなたが、こうしてくださったのですから。私はあなたの聖徒たちの前で、いつくしみ深いあなたの御名を待ち望みます。

自分のことをダビデは、「神の家にあるおい茂るオリーブの木」と言っています。ダビデは、偽りの心をもって神の幕屋に来たのではなく、真実に神の家を求めていました。そして神のおられるところには、いのちの水があります。それゆえ実を多く結ぶオリーブの木のようになることができます。そして、彼は再び「恵みに拠り頼む」と強調しています。事実、ダビデは王となってからヨナタンの息子メフィボシェテを王の食事に席に付かせ、彼にサウルの地所を回復させました。彼は足なえであり、社会的には取るに足りないものなのです。けれども、彼は恵みに拠り頼みました。そこに、神の恵みが流れていくことを知っていました。

ですから、恵みの原則はどんな悪や不利な状況にあっても、それを乗り越えて必ず支配するのです。「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。(ローマ 5:21)」

3A 誰一人いない善人 53

こうして人の罪深さと、それゆえの神の恵みを見ました。次は以前も出てきた詩篇 14 篇と同じです。けれども、詩篇を編纂する時にここに再び置いたというのは意味があると思います。

1B 腐り果てた者たち 1-3

53 指揮者のために。「マハラテ」の調べに合わせて。ダビデのマスキール 53:1 愚か者は心の中で「神はいない。」と言っている。彼らは腐っており、忌まわしい不正を行なっている。善を行なう者はいない。53:2 神は天から人の子らを見おろして、神を尋ね求める、悟りのある者がいるかどうかをご覧になった。53:3 彼らはみな、そむき去り、だれもかれも腐り果てている。善を行なう者はいない。ひとりもない。

ダビデが自分の母の胎から自分が咎ある者とみなし、そしてドエグに人が持っている悪を見ました。そして今、人間の全てを見ています。神ご自身が天から人を見渡して、誰がいるかどうかご覧になっても、みなが背き、腐り果てています。善を行なう者は誰一人としていないのです。これをパウロは、ユダヤ人を含めてすべての人に対して当てはめて、ローマ 3 章で引用しています。そして、「すべての人の口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。(20 節)」と言いました。私たちは、「これだけ良いことを行ったのであれば、天国に行っているはずだ。」と言いますが、それは間違いです。それはまだ、人間の真実な姿を正直に見ていないからです。

初めにダビデは、「愚か者は心の中で「神はいない。」と言っている。」と言っています。人は、自分を造られた神なしには、このように腐り切ってしまうのです。神の恵みなしに、人は救いようもなく、望みがないのです。

2B シオンから来る救い 4-6

53:4 不法を行なう者らは知らないのか。彼らはパンを食らうように、わたしの民を食らい、神を呼び求めようとはしない。53:5 見よ。彼らが恐れのないところで、いかに恐れたかを。それは神が、あなたに対して陣を張る者の骨をまき散らされたからだ。あなたは彼らをはずかしめた。それは神が彼らを捨てられたからだ。53:6 ああ、イスラエルの救いが、シオンから来るように。神がとりこになった御民を返されるとき、ヤコブは楽しみ。イスラエルは喜べ。

この詩篇が何を背景としているのか、二つの可能性があります。一つは、バビロン捕囚です。イスラエルに神の民が帰還している姿を 6 節は描いています。そして 4 節は、バビロンにて、神を無視している民から、ユダヤ人が虐げられている姿であるとしています。もう一つの可能性は、ヒゼキヤ時代のアッシリヤの包囲です。5 節が、一夜にして滅ぼされたアッシリヤ軍の姿を描いているとしています。私は二重となっているのでは？と思い始めました。ヒゼキヤの時に神の救いを思い出して、捕囚の民がここシオンにこそ救いがあるとして帰還している姿です。けれども、ダビデが歌っているので、ダビデは間違いなく将来を見ており、預言している訳です。

いずれにしても、神なしの世界はこのように悲惨であるということ。シオンにおられる神、そこで十字架につけられ、よみがえられたイエスのみが私たちを救ってくださる主であるということを教え

ています。

4A 見知らぬ者の敵意 54

54 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデのマスクール。ジフの人たちが来て、「ダビデはわれらの所に隠れているではないか。」とサウルに言ったとき

52 篇にあるドエグは、サウルに仕えていましたがエドム人でした。ここのジフの者たちはイスラエル人、しかもダビデと同じユダ族です。同族であっても、平気でダビデをサウルの手に陥るように告げ口するところにある裏切りと悪を見ていきます。

この話は、ジフの荒野に逃げていた時に起こりました。そこにいる住民がダビデのありかをサウルに伝えたので、ダビデは死と隣り合わせになりました。逃げに逃げましたが、たった一つの岩を仕切りにするだけとなりましたが、そこでイスラエル領にペリシテ人が侵入してきたという知らせがサウルに入りました。それで引き上げたのです。それでダビデは救われましたが、なぜジフの者たちは彼の居場所を伝えるのでしょうか？さらに彼らは、ずっと後にもサウルにダビデの居場所を伝えました。

もう一人、ケイラというところにいる人々もダビデを裏切ったことが書かれています。ジフの荒野に行く前です。彼らはペリシテ人に襲われたのですが、ダビデたちは彼らを救い出しました。ところがサウルが来るということになった時、ダビデは主に伺いを立てて、ケイラの者たちが引き渡すのかどうか？と尋ねたら、引き渡すという答えがあったので彼らは逃げたのです。このように、自分が受けた恩を仇で返すようなことをするのも人間の現実です。

その時、イスラエル人はいつも二つの選択肢が与えられていました。そこではサウルが未だ王として君臨していました。彼に従うこともできます。けれども事實は、神がダビデを王として選んでおられました。だからダビデが苦境に陥っていたら、彼と共にいることもできました。これはつまり、ただ肉に従って生きることと、御霊に導かれて生きることの選択肢です。私たちが、人間の目に見えること、常識に従い、自分の知恵や力に拠り頼むなら、ジフやケイラの人々のようになります。けれども、御霊によって生きるならダビデに付いていく者たちのようになります。肉に反応するか、御霊に応じるかの選択があるのです。

1B 神を前に置かぬ者 1-3

54:1 神よ。御名によって、私をお救いください。あなたの権威によって、私を弁護してください。

54:2 神よ。私の祈りを聞いてください。私の口のこぼれに、耳を傾けてください。54:3 見知らぬ者たちが、私に立ち向かい、横暴な者たちが私のいのちを求めます。彼らは自分の前に神を置いていないからです。セラ

自分が悪を被った者であるならまだしも、見知らぬ者がなぜ立ち向かうのでしょうか？けれども、私たちは人間の世界で頻繁にこの姿をみます。テレビで出てきた人で、悪いことをしたのではないかとと思われる人に対して、マスコミの煽りもあってか、ここまでやるのか？と思われるぐらいの罵声を浴びせる姿を見ます。自分が何かされたのであればまだ分かるのですが、何もされていないのです。このような、ゆえもなく行なう悪は人間の罪深さの典型です。

そしてダビデは端的に、見知らぬ者が立ち向かうことのできる理由を書いています。「**自分の前に神を置いていない**」ことであります。ダビデは自分の前に神を置いていたので、自分が罪を犯した時にただ打ちひしがれるしかできませんでした。神を前に置く者は、へりくだりが与えられ、悔いた心が与えられます。しかし神はいないとして心から排除する者は、悪を行なえます。そして、神はいると信じていても、自分の前に置かない人は同じように悪を行なえます。

2B 命を支える方 4-7

54:4 まことに、神は私を助ける方、主は私のいのちをささえる方です。

ダビデは大事な信仰告白をしています。自分を支えているのは自分ではありません。そして、自分の命を支えているのも自分ではありません。ただ主なる神が支えておられます。このことを知るだけで私たちは平安でしょう。自分の命を自分で支える必要がないのです。自分が福音のため、神の義のために死んでも、神が自分を生かしてくださるのですから。パウロは、ダビデと同じように死にそうになった時がありました。こう告白しています。「**ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。(2コリント 1:9)**」

54:5 神は、私を待ち伏せている者どもにわざわいを報いられます。あなたの真実をもって、彼らを滅ぼしてください。54:6 私は、進んでささげるささげ物をもって、あなたにいけにえをささげます。主よ。いつくしみ深いあなたの御名に、感謝します。54:7 神は、すべての苦難から私を救い出し、私の目が私の敵をながめるようになったからです。

ダビデは信仰の中で、ジフの人たちを神が滅ぼされる姿を見えています。彼が事実、ユダの王、そしてイスラエルの王となった時に、彼はこの裏切った住民を滅ぼしたのでしょうか？聖書にはそのような記録がありません。むしろ、ナバルという愚か者をダビデが殺そうと思って向かっていた時に、その妻アビガイルが、その流血が、あなたが後で王となった時につまずきとなりませんように、と祈っています。ダビデは神の裁きを自分の手で下すことを拒否していたのです。ダビデは平和を造る人でした。けれども、それは彼が信仰の中で神が彼らを裁かれることを信じ、祈っていたからできたに他なりません。

神に復讐をゆだねる祈りを捧げたので、ダビデ自身に心の余裕が与えられています。進んで捧げる捧げ物によって、いけにえを捧げられています。そして神の慈しみ深い御名に感謝できています。そして、その敵がつぶされているのを信仰によって眺めていることができています。このことによって余裕があるのです。私たちは悪に妬みを抱く暇はありません。主を喜び、主に感謝し、主に仕える生活が必要です。そのために必要なのは、主が自分を支えておられることを知ること、そして裁きも主がしてくださることを知ることです。

5A 親しい友の裏切り 55

そして詩篇 55 篇は、これまで以上の最も苦しい祈りをダビデは捧げています。なぜか？エドム人でもなく、ユダ族でもなく、自分の側近、親友が自分を裏切ったからです。この詩篇の背景は、アヒトフェルの裏切りです。自分の息子アブシャロムが、ヘブロンで王であると宣告、彼になびく者たちは大勢いました。ダビデはエルサレムが血の海になることを恐れ、逃げることを選んだのです。そしてアブシャロムたちがエルサレムにきました。そこに付いていたのが、ダビデの顧問であり、友人であったアヒトフェルです。ダビデは、アヒトフェルがアブシャロムの謀反に加担していることを聞いた時に、こう祈っています。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。(2サムエル 15:31)」彼の助言は天才的なものだったからです。

そしてアブシャロムに対して、アヒトフェルは、宮殿に残していたダビデの十人のそばめと、屋上で寝台を設けて寝なさいという助言をしました。王の女たちと寝ることは、王権を奪い取った一つの象徴的儀式のようなものでした。しかし神はその後、祈りを聞いてくださりアヒトフェルの助言を愚かなものとしてくださったのです。ダビデを殺すことに特化する計画を彼は立てていましたが、アブシャロムは全軍を率いて、ダビデたちのところに行ったのです。

1B 泣きわめき 1-8

55 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデのマスキール 55:1 神よ。私の祈りを耳に入れ、私の切なる願いから、身を隠さないでください。55:2 私に御心を留め、私に答えてください。私は苦しんで、心にうめき、泣きわめいています。55:3 それは敵の叫びと、悪者の迫害のためです。彼らは私にわざわいを投げかけ、激しい怒りをもって私に恨みをいだいています。

ダビデは冷静に祈ることさえできていません。「心にうめき、泣きわめいています」と言っています。気が狂いそうになりそう、ということ、発狂寸前だということです。そしてここで知っていただきたいのは、神は気が狂いそうになっているその叫びさえ聞いておられるということです。神はご自分の子に心を留めておられます。その小さな声や呻きも聞いておられるし、発狂しそうな声も聞いておられます。

そして、ダビデは感じ取っていました。彼らの激しい怒り、そして恨みです。アブシャロムにある恨

み、それからアヒトフェルはおそらく、自分の孫娘のことを思って苦みを持っていたのでしょう。彼の孫娘がバテ・シェバだからです。ダビデが行ったことを知っていたのかもしれませんが。

55:4 私の心は、うちにもだえ、死の恐怖が、私を襲っています。55:5 恐れとおののきが私に臨み、戦慄が私を包みました。55:6 そこで私は言いました。「ああ、私に鳩のように翼があったなら。そうしたら、飛び去って、休むものを。55:7 ああ、私は遠くの方へのがれ去り、荒野の中に宿りたい。セラ 55:8 あらしとはやてを避けて、私ののがれ場に急ぎたい。」

このダビデの思いは、簡単に言うと「引きこもり」です。引きこもりは、現代社会の言葉であると思われるかもしれませんが、見事に三千年ぐらい前の出来事で現代の問題と同じ気持ちを吐露しているのです。しかしもちろん、ダビデはそのようなこともできない状況であることを知っています。それで、祈りの中だけでこの気持ちを言い表しています。

2B 内にある敵 9-15

55:9 主よ。どうか、彼らのことばを混乱させ、分裂させてください。私はこの町の中に暴虐と争いを見えています。55:10 彼らは昼も夜も、町の城壁の上を歩き回り、町の真中には、罪惡と害毒があります。55:11 破滅は町の真中にあり、虐待と詐欺とは、その市場から離れません。

ダビデは発狂しそうになっているのは、悪者がまさに、エルサレムの城壁の中で、神のおられるはずのシオンにおいて、そこで罪惡と害毒を行っているからです。神のおられるはずの家で、どうしてこのような暴虐、争い、害毒、また虐待や詐欺があるのでしょうか？彼は悩んでいます。

けれどもダビデの9節の祈りは聞かれます。「彼らのことばを混乱させ、分裂させてください。」ダビデは、フシャイという友をエルサレムに送り込みます。フシャイはアブシャロムになびいたように見せかけました。アヒトフェルが、いかにダビデを倒すかを助言しました。けれどもアブシャロムは、他にもフシャイの助言を聞こうと言いました。アヒトフェルの助言は確実に勝利できるもの、であったのですが、彼にはダビデ個人に対する怨讐があったのです。それをかぎつけたのかどうかは分かりません、セカンド・オピニオンを求めたのです。フシャイは、全軍を率いてダビデを攻めるべきだと助言しました。これはアブシャロムの自惚れをくすぐるものでした。それで、これを採用したのです。興味深いことに、サムエル記の著者はこう書いています。「これは主がアブシャロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれたはかりごとを打ちこわそうと決めておられたからであった。(2サムエル 17:14)」

55:12 まことに、私をそしめる者が敵ではありません。それなら私は忍べたでしょう。私に向かって高ぶる者が私を憎む者ではありません。それなら私は、彼から身を隠したでしょう。55:13 そうではなくて、おまえが。私の同輩、私の友、私の親友のおまえが。55:14 私たちは、いっしょに仲良く

語り合い、神の家に群れといっしょに歩いて行ったのに。55:15 死が、彼らをつかめばよい。彼らが生きたまま、よみに下るがよい。悪が、彼らの住まいの中、彼らのただ中にあるから。

友の裏切りほど辛いものはありません。彼は、ダビデと共に神の家の群れといっしょに歩いたのです。神の家族であったものが、神から離れるのを見るほど辛いことはありません。しかし、イエス・キリストがこれを受けてくださいました。三年半ぐらい、生活を共にして十二弟子の一人になっていたイスカリオテのユダが、イエス様を裏切ったのです。

3B 重荷を負われる主 16-23

55:16 私が、神に呼ばわると、主は私を救ってください。55:17 タ、朝、真昼、私は嘆き、うめく。すると、主は私の声を聞いてくださる。55:18 主は、私のたましいを、敵の挑戦から、平和のうちに贖い出してください。私と争う者が多いから。

ダビデがこのような、発狂寸前の状態から救われているのは、神が祈りを聞いてくださっているからです。ダビデが一日中、嘆いて、呻いていました。その声を主は聞いておられました。ですから、私たちは祈りに時間を割くべきですね。自分が苦境に陥っている時に、嘆いても、泣き喚いたとしても、その分、主はその祈りを聞いて、救ってくださいます。

ダビデは、ここで祈ったとおり、平和のうちに贖い出されました。アヒトフェルは自殺しました。アブシャロムはその長い髪が木に引っかかり、ヨアブが彼を一突きで殺しました。大きな被害者も、流血も起こることなくダビデはエルサレムに戻ることができたのです。

55:19 神は聞き、彼らを悩まされる。昔から王座に着いている者をも。セラ 彼らは改めず、彼らは神を恐れない。55:20 彼は、自分の親しい者にまで手を伸ばし、自分の誓約を破った。55:21 彼の口は、バターよりもなめらかだが、その心には、戦いがある。彼のことばは、油より柔らかいが、それは抜き身の剣である。

神は、ここに書いてあるような、滑らかな言葉を悩まされます。バターのように滑らかだけれども、心には戦いがあります。また油よりやわらかでも、剣のような言葉です。私たちは言葉をどのように話すかという技法を学ぶのではなく、内なる心の態度をいかに神の前に清く保つかということに細心の注意を払うべきです。そうしないと、いくら口で優しく、恵み深く話しているように見えても、相手にとって剣のように刺していくのです。

55:22 あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してください。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさない。

これが、この詩歌の鍵となる言葉です。発狂しそうになるこの重荷を主に委ねます。心配事を主に心配していただきます。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。(1ペテロ 5:7)」

55:23 しかし、神よ。あなたは彼らを、滅びの穴に落とされましょう。血を流す者と欺く者どもは、おのれの日数の半ばも生きながらえないでしょう。けれども、私は、あなたに拠り頼みます。

ダビデは先ほども、「彼らが生きたまま、よみに下るがよい。」と言いました。このような悪、神の宮のあるところにおける暴虐、そして神の家の群れを共にしたものが裏切って行っていること、こうした悪は今すぐにでも陰府に下るべきものだと言っています。コラの反乱を思い出します。彼も、主の幕屋のそばで奉仕していた、レビ族のケハテの者であったにも関わらず、いやむしろ近かったからこそアロンの位を欲しがったのだと思います。彼は反逆し、それで生きたまま陰府に下りました。

このように、主の近くにいる者でさえ、アヒトフェルのような、神の人ダビデの傍にいる者でさえ、暴虐に走る罪深さを我々人間は持っています。近いからこそ、ねたみ、争い、貪りとう欲望が出てくる、ということです。私たちが、そうしたものから自分を守る努力を惜しまないことは、もちろんです。けれども、それが根本の解決ではありません。それよりも、神の豊かな恵みに拠り頼むことです。ここでもダビデは最後に、「私は、あなたに拠り頼みます。」と言っています。ダビデは、罪咎で生まれてきたということを認識しました。自分はどうしようもないのです、救いようがありません。しかし、自分自身を頼りにすることなく、神に頼りました。そして神の恵みはどんな困難さえも、必ずその通りになります。